



安子夫人スケッチ「実篤と辰子」  
昭和16年（1941年）ころ

ある日、辰子さんが大好きなミカンを食べて思わず「ああ、このミカンでよみがえった」と言ったら、パパから「なんだとお前はよみがえったらいったい何になるんだい？」とするどい突っ込みが。  
辰子さんはウツとつまって「ウ…、ウ…、ウ…頭をぶつよ！」

なぜパパは子供の言い分を通し  
てしまうのだろうか。（中略）パパ  
が断乎としてその時の姉の言うの  
を退けて、「トルストイ全集」を  
買った良かったのに……と思っ  
てしまう。  
父は何ごとによらず本人の考え  
を先行させるらしかった。  
本人が要求しないことは、良い  
と思ってもすすめる気はないらし  
かった。

（武者小路辰子「ほくろの呼鈴」より「勉強」）



実篤と三女・辰子さん（10歳ころ）

あなたは  
あ？

あなたの家族が今頑張っている  
ことは何か、知っていますか？  
あなたが今頑張っていることは  
何か、家族は知っていますか？

家族と話してみませんか。



かけっこの苦手な私が運動会に  
行く朝、父は「ビリ等、パンサー  
イ」などと言って見送ってくれる。  
ついでにつけ加えると、ビリに  
なるな、とか、がんばれとかは言  
わない。

（武者小路辰子「ほくろの呼鈴」より「見送り」）

# もっと知りたい

## 武者小路実篤

### 実篤と家族 3

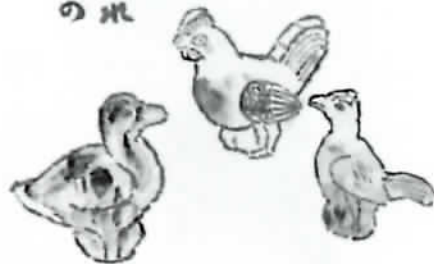
武者小路実篤は子どもたちそれぞれの性格や、得意なこと、不得意なことなどをよく知っていて、その個性を認めていました。

また、小さくても一人の人間なのだから、と、どんなことでも子どもの気持ちを尊重しました。

三つの鳥の置物はそれぞれ形が違うけれど、とても仲がよさそう。実篤の三人の子供のようですね。



三人と珠  
ば文珠の  
智慧



八十三歳  
実篤

左から実篤、三女・辰子さん、長女・新子さん、次女・妙子さん、安子夫人 昭和12年（1937年）



自分が生まれたという事も、親の愛、親への愛だけでも、僕は生れた事をよかったと思っている。そして娘達も、そう思っってほしいと僕は思っている。

〔一人の男〕第一七九章

上はもっと小さい時にはパパっ子と言われていたし、自分でもそう言っていた。（中略）体質も僕に似ている。神経の動きの速度も僕と同じだ。

〔牟礼随筆〕より「子供たち」

妙子は母親似で（中略）人のいい事は無類で僕は妙子には一度も怒った記憶はない。

〔一人の男〕第八六章

（下の子は）この子は十一だが非常に神経過敏な児なので、僕の子供の時に実に似ている。

〔牟礼随筆〕より「遺伝」